

学校のあした

県内・進む統廃合

第1部 それぞれの選択 ④

「小学校の統廃合は今後5年間は進まない」。昨年11月、全国で進む統廃合の流れと一線を画し、存続へ向けてかじを切った町がある。兵庫県香美町だ。人口約1万9千人。自然

豊かな同町も少子化が進む。10年前に1374人いた小学生は今、千人を割り込んだ。町内の小学校10校中、香住小学校以外の9校は、総学級数が12クラス未満の小規模校。町内のほとんどが統廃合の検討対象と



小規模校つながり補完

香美町(兵庫県)の挑戦(上)

なってしまうのが現実だ。それでも「つぶす」ありきで話を進めて良いのか、町の衰退につながるのでは

使って遊ばせよう。9月28日朝。海にほど近い、余部小学校に同小御崎分校と栗山・長井小学校の1、

小規模校は普及からきめ細やかな少人数指導が成立している。一方、人間関係の固定化を懸念する所もあり

って、冬場の移動も楽ではない。それでも町が考案した試みは、新しい教育の在り方として評判を呼び「全

国から視察が絶えない(香美町教育総務課・水垣清和副課長) 状況だ。統廃合が進めば過疎化も進み、地域にとって大きなマイナスだ。同町の朝倉寿文教育長はこう話す。

の資料によると、町で現在のペースで人口減少が続けば、2040年には20〜39歳の若い女性が6割以上いなくなり、現在の半分近くになると試算される。

「しかし、ね」と朝倉教育長。「田舎に学校がなくなると、人材が足りなくなると、教育が続かない。古里に戻ってくる人なんてもちろんいない。小さな学校が生き延びていることは、長期的にみれば町が生き延びていくことにつながる。少人数を強みとした新しい教育の形が、これからの日本、特に地方に必要とされているのではないだろうか」

ないから。2年近い議論の末、町は結局、しない選択肢を選んだ。そこで少ない人数の中で、団体生活の規律などを学ばせるべきか。導入したのが「学校間スパー連携チャレンジプラン」と銘打った、連携グループ授業だった。「さあ、一緒にボールを

2年児童がやってきた。4校合わせて約40人がそれぞれ名札を付け体育館に集まる。ドッジボールなどをして汗を流し、学校近くをみんなで探検して歩いた。全校児童2人という御崎分校の岡田若菜さん(7年)は「1人が病気で休むと、学校には自分ひとりぼっち。大勢と話せるのは楽しい」と笑顔。長井小の小倉倫輝君(同)は「あの子に絶対負けられない」と張り切った。連携グループ授業の実施がどれほど学力の向上につながっているか未知数な部分はある。山間部で積雪1月半を超える豪雪地帯にと



4校合同でボール遊びをする子どもたち。「大人数で体育の授業ができて楽しい」という声が上がった。9月28日、香美町余部小